



双塔

カトリック新潟教会

2018年7月
No. 362

種まきのたとえ

協力司祭 鎌田耕一郎

(信仰の挫折) パレスチナの農夫は、ムギ、ぶどう、オリーブの三つの作物で生計をたてていた。ムギは主食であるパンのために、最も重要な作物であり、種まく人の種はムギを想定したものと思われる。「神のみ言葉」であるまかれた種の中で、道ばたと石地、そしてイバラの中に落ちたものは、失われ、枯れ、実を結ぶことができない。このたとえは、その点に注目すれば信仰の挫折のたとえであると言えよう。輝かしい殉教者や証聖者に飾られた教会の歴史は、その反面に痛ましい背信の記録も伴っている。初代教会において、背信者は、離れ行くもの、去り行くものの意であるアポスタタと呼ばれた。それらの要因は、極めて複雑であるが三つに要約することが出来よう。

最も目立つものは殉教の恐怖である。迫害は「キリスト信者の種子」(テルトリアヌス)といわれる殉教者の尊い血を流したが、それは平和な、平凡な生活を望む人間のごく自然な願いを粉碎するものであり、多くの棄教者を生んだのである。踏みつけられ、空の鳥についばまれるという外的な力による脱落である。

第二は異端的傾向をあげることができよう。キリスト教が古代社会に広まって行った当時、人々は自分の有していた伝統的考え方、すなわち、ある者はユダヤ教、ある者はギリシャ思想から見、接触して行ったのは当然である。しかし完全な同化がないため、新しいブドウ酒が古い皮袋に入れられて両方とも駄目になるように、或いは石地に芽生えた根なし草のように枯れていったのである。

第三は、道徳的生活への絶望である。その当時の世界では盗まず、誠実な罪なき生活を送ることが特に困難であったことが知られている。2世紀に書かれたヘルマスの著書には「真理を探究せず、神について掘り下げてみようともせず、表面的な信仰に満足し、雑事、金儲け、その他もろもろの俗事に没頭している輩」が墮落し、無益なものになっていることを慨嘆しており、これはイバラの中に落ちた種を思わせる。(近山金次「初代教会におけるアポスタタ」参照) 私たちも、これらの可能性の外に立っているわけではないことを忘れてはならない。

(順応) 作物は、それが栽培される土地の気候、土質などに大いに影響されることは言うまでもない。ムギのような世界的な作物であっても、それぞれの地方に適した品種を選ばなければならない。パレスチナのムギが、日本の気候風土に適するか、栽培可能としても十分な収穫をあげ得るか否かは疑問なのである。種まきのたとえは、2000年前、中東のパレスチナ地方で、ユダヤ民族の一人であったイエス・キリストにおいて語られた、神のみ言葉の普遍性と順応の問題に気付かせる。

作物の新しい品種の育成は、交配その他の育種学的方法によって長い時間をかけて行なわれる。優れた適性を持つ品種が生み出されたとしても、依然としてムギである。本質にいささかも変わりが無いことを考えるならば、教会の未来図は、それぞれの風土に最もふさわしいムギの実る、多様性の中の普遍と統一のムギ畑になるのではないだろうか。

キリストの教えは、ユダヤ民族の生み出した単なる一文化、一思想ではなく、神から啓示された超文化的・普遍的な教えなのであり、その日本風土への順応の問題は、私たちに委ねられた大きな課題なのである。



そよかせ便り



■ 日本カトリック女性団体連盟総会開催 ---- 5月21日(月)・22日(火) ----

日本カトリック女性団体連盟第44回総会が新潟教会を会場に開催され、仙台、新潟、茨城、名古屋、福岡、熊本、大分、長崎、那覇の各地から女性信徒の団体の会員が参集した。21日にはセンター2階で総会、センター1階ではバザーを開催、新潟教会の「東大畑茶寮」や近隣の小教区信徒有志の協力で新潟の特産品などが並べられた。翌22日には、「いのちへのまなざし ～なぜ教会は人を助けるのか～」と題して菊地大司教様が講演。その後、菊地大司教様、濱口末男司教様(大分教区)、各加盟団体指導司祭や新潟市内の神父様方の共同司式で派遣ミサが行われ、散会した。

■ 愛の共同募金 ---- 5月27日(日) 12:00 ----

「カリタスジャパンです。世界で命の危険に直面している人たちのために愛の募金活動をしています。ご協力よろしくお祈りします。」と新潟・青山教会の有志で万代シティバスセンター1Fにてプラカードをかかげて街頭募金を行った。月末の日曜日とあってか、子供連れの家族が多いように感じた。両親から手渡されたお金を募金箱に入れてくれたお子さん、一度通り過ぎたが戻ってきて募金してくれた娘さん、少しはにかみながら募金してくれた女子高生、プラカードをみて考えた上に募金してくれた若い男性、迷うことなく募金してくださるご高齢の方々、中には募金箱すべてに募金してくださる方もおられた。感謝の気持ちで満たされた1時間はあっという間に過ぎた。

■ 聖体賛美式 ---- 6月3日(日) 9:30 ----

イエス様は1200年続いた過越祭の「パンは苦しみ、葡萄酒は喜び」のしきたりを、「パンはキリストの体、葡萄酒はキリストの血」とされ、全ての人の苦しみをご自身の体にまとめてくださった。全ての人の苦しみを背負われて十字架に付けられたキリストは十字架に残らない、生き返った、苦しみには人間を殺す力がない、苦しみを乗り越える力をキリストとともに私たちは頂いている、その信仰をもって私たちがご聖体を頂けば、聖体拝領がどれほど素晴らしく価値があるかがわかると、キリストの聖体の祭日にラウル神父様は説かれた。その後、司祭用のホスチア(パン)がはめられた聖体顕示台が献香された後、会衆に向けて掲げられ、聖体賛美式が司式された。



■ 消防訓練 ---- 6月17日(日) 9:30 ----

ミサ終了後、非常ベルの音を合図に消防訓練が行われた。出火を想定し、聖堂内から聖堂前花壇に避難する流れで行われ、その後新潟市消防局新潟中央消防署附船出張所の3名の消防職員の指導の下、訓練用消火器を実際に使い、「燃える炎に向かって消火するのではなく、燃えているものに向けて消火すること」などアドバイスを受けながら万が一に備えての消火訓練となった。また、消防職員の話によれば出火原因一位は「放火」次いで「暖房器具によるもの」「コンセント等による発火」と身近に起こりうることを改めて認識。今一度身の回りに目を向けて防災意識を高めてほしい、出火したら速やかに身の安全の確保に努めてほしいとの呼び掛けもあった。

あゆみ

No.90 小教区評議会

講座「知ってるつもり?! 典礼のしるし、ことば、動作」

指 導 主任司祭 ラウール神父

開催日時 2018年7月14日(土) 午前10時～11時

会 場 カトリックセンター研究室

※ 『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』を手掛かりに典礼について学びます。
どなたでもお気軽にご参加ください。いつからでもOKです。

カトリック新潟教会 月刊「双塔」 毎月1回 最終日曜日発行 編集・発行/カトリック新潟教会 小教区評議会 広報部
〒951-8106 新潟市中央区東大畑町通一番町656 TEL:025-222-5024 FAX:025-222-5054